

第10回 家活グランプリ 入選作品講評

審査委員長 北川 太一（摂南大学農学部 特任教授）

最優秀賞

「『家の光』をもっと身近に」

岐阜県 JA いび川 野原 朋美さん

高齢化やコロナ禍の影響で女性部員が減少するなかで、もう一度仲間づくりを進めるために、女性部公式LINEを活用した情報発信に力を入れました。スマホ教室によるサポートを行い、『家の光』を読んだ感想を手書きのPOPにまとめてLINEで発信などした結果、400名の登録を実現。直売所には、料理も含めた食の大切さを知ってもらうために『家の光』を設置し、本店隣接の「Café 笑味ちゃん」前では、フレミズのメンバーが『家の光』も参考に野菜作りに取り組みました。こうした活動の結果、『家の光』購読者や活動参加者の増加につながりました。SNS活用を効果的に活用すること、食と農をはじめとする活動の拠りどころとして農産物直売所が重要であることを教えてくれる作品です。

優秀賞

「家活でみんなの笑顔の種まきを🌱」

青森県 JA 津軽みらい 村上 紀美子さん

共済担当者から、JA共済が進める地域貢献活動のコンテンツを女性部活動にも活用する提案があり、女性部主体ではなくJA主体の企画として、JA共済のキャラクターショーも取り入れたちゃぐりんフェスタを開催。『ちゃぐりん』を活用した食農教育に関するクイズや体験教室も実施したところ、多くの人に参加し、地域が一つになったイベントが実現しました。これがきっかけとなり、女性部の活動も活発になり、『家の光』も目標部数を大きく上回る成果が得られました。本店や他の部署と連携して活動することの大切さを教えてくれる作品です。

優秀賞

「家の光でホップ（読んで）・ステップ（活用して）・ジャンプ（地域の輪）！！」

福島県 JA ふくしま未来 吉田 桃子さん

支店の統合により活動の拠点が減る中で、女性部の支部は従来の数を維持しながら様々な活動を展開。特に、令和元年の東日本台風被害をきっかけに、SDGs の学習から声が上がったこども食堂は、調理メニューを伝統食や行事食にすることで、子どもだけではなく多くの大人も集まる場となり、全世代型の食農教育として活動が展開しています。また、女性大学講座「みらいスクール」では、余った野菜でSDGs のレシピを学ぶ料理教室や、ハンドメイドのキットを利用した防災ブレスレットづくりを行い好評を得ています。地区の活動を、JA 全体で共有する「地域支援活動コンクール」も、注目される取り組みです。

佳作

「女性部実態調査で“意欲を尊重する”「家活」へ」

岩手県 JA いわて花巻 中村 美冴さん

10 年ぶりに女性部を担当すると、直面したのは当時より半分近くにまで部員が減少していることでした。そこで、「新部員加入歓迎奨励」の機会を利用して実態調査を実施。その結果、高齢化で引退する人がいる一方で、新部員は 70 名以上にのぼること、支部活動だけでなく、趣味グループ「きらきら星サークル」の活動を通じた人が多いことがわかり、趣味を入り口に自主的な活動を楽しむ人が増えていることを実感しました。地域の人たちにこうした活動を知ってもらうための PR に力を入れ、女性部員主催による防災料理教室も実施。担当者として、現状をしっかりと把握すること、その結果を活かしながら次の活動へと進めていくことの重要性を教えてくれる作品です。

佳作

「せっかくやるなら！」

神奈川県 J A あつぎ 中村 由記さん

コロナ禍が明けてきたタイミングで、生活指導員に着任。この間の自粛で継続するものも少ないため、手探りでスタートとなりました。「せっかくやるなら」と、部員の声を聴き、それを反映した和菓子作り講習会を企画。「ふるさと先生」の協力も得ながら、『家の光』の記事を活用し、地域の伝統的な生活文化や郷土料理の継承をテーマに実施したところ、多くの参加があり笑顔あふれる活動となりました。その他にも、手芸、親子ふれあい農園・ちゃぐりんフェスタ、廃油石鹸作り講習会など、『家の光』の記事をフル活用して活動を展開しています。部員の声を聴き、地域の人たちの知恵や技も活かせば、多彩な活動が展開することを教えてくれる作品です。

佳作

「『家の光』と今日も行く！」

岡山県 J A 晴れの国岡山 長尾 初季さん

担当支部では100人を超える女性部員が在籍していますが、中には10人以下の少人数班もあり、関係機関から最低開催人数が求められるために、講師のあっせんなど活動の協力が得られなくなる事態に直面しています。こうした事態を打開すべく、自ら講師となることを決意。『家の光』を引っ張り出して料理教室の実施に向けて猛勉強した結果、年間5回の料理教室を開催することができ、班の解散を回避することができました。その他「畑の時間」も活用しながら、家庭菜園の栽培講習会も実施したところ、営農指導員の協力も得て地産地消の流れができつつあります。担当者の奮闘はもとより、関連部署と連携し『家の光』を手掛かりに活動のヒントを探ることの重要性を教えてくれる作品です。